

令和元年6月13日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03344

研究課題名(和文) 冷戦の起源1942-1947

研究課題名(英文) Origins of the Cold War 1942-1947

研究代表者

柴山 太 (Shibayama, Futoshi)

関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号：50308772

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果については、次の貢献ができたと思われる。第1に、これまでの研究は、米ソ史観、いやほとんどが米国中心史観で、冷戦起源論を書いてきたが、本研究では、積極的に英国の役割を書き込み、3国史観の導入に成功し、英国の大きな役割がなければ、冷戦勃発は語れないところまで、論じることができたと思っている。第2に、本研究は、軍部資料、とりわけ英米のそれを積極的に使用した。その結果、これまで多くの外交史家たちが見逃してきた、軍部の役割や軍事的算定の意味を、冷戦勃発に関係づけることに成功した。第3に、第2次世界大戦中から継続して来た英米軍事同盟が、どのように冷戦勃発に関連したかも明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

具体的には、次の貢献ができたと思われる。第1に、これまでの冷戦研究は、米ソ史観、いやほとんどが米国中心史観で、冷戦起源論を書いてきたが、本研究では英国の役割を重視し、英米ソ三国史観を導入した。英国の大きな役割がなければ、冷戦勃発は語れないと自負している。第2に、本研究は、英米軍部資料を積極的に使用した。その結果、これまで多くの外交史家たちが見逃してきた、両軍部の役割や軍事的算定の意味を、冷戦勃発に関係づけることに成功した。第3に、第2次世界大戦中から継続して来た英米軍事同盟が、どのように冷戦勃発に関連したかも明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：This research project made the following academic contributions. First, most historical researches have focused on U.S.-Soviet perspective, in fact in most cases, U.S. perspective, in dealing with the origins of the Cold War, the most significant in understanding the nature of the Cold War. But this research project successfully introduced an indispensable status of Great Britain in bringing out the Cold War. In other words, this project introduced Anglo-American-Soviet perspective on the origins of the Cold War. Second, this project vigorously collected military documents, especially Anglo-American ones, for identifying and analyzing both military involvements and influences in both governments' decision-making processes, related with the beginning of the Cold War. Third, this project also clarified the role and nature of Anglo-American military alliance, which started in June 1940, made substantial influence on the beginning of the Cold War.

研究分野：国際関係史

キーワード：国際関係史 冷戦史 冷戦の起源 英米軍事同盟

1. 研究開始当初の背景

いわゆる冷戦の起源をめぐる論争は、これまで米ソ史観、いやその実は米国中心史観にすぎなかった。またこの論争に参加するほとんどの学者は、外交史家が多く、意図的かはともかく、軍部関係史料を収集・検討することがなかった。その結果、2005年以降、ソ連外交史家の側から、スターリン文書を検討すれば、彼はけっして冷戦勃発を好んで行ったわけではなく、むしろ嫌がっていたとの報告が行われた際、学界はパニック、無視、そして活動停止の状況に陥った(ただし彼らにしても、なにがスターリンをそこまで追い詰めたのかについては解明できていないが)。このソ連研究者の問いかけに無視の姿勢を採る学者たちは問題外としても、パニックや活動停止に追い込まれた多くの良心的学者の学問的立場には、それなりの同情を禁じ得ない。私もその一員であったからである。確かに、碩学 J・L・ギャディスを始め、最も実証的なかつバランス重視の研究者は、これまで冷戦勃発に関して、スターリンの責任を問い、そして彼が確信に基づき、かつ勇躍、この決断をしていたと信じていたからである。そのスターリンが、嫌々ながら、冷戦開始を行ったというのである。なぜ、いやなにが、彼に嫌な決断をさせたのであろうか。研究上のボールは、ソ連外交史研究のコートから米国外交史のコート、いやその枠組みを超えたコートへと撃ち返された、とすべきか。この深遠な研究上の危機ともいえる状況のなか、どのような研究アプローチを採るべきか、今も、世界中でたゆまぬ模索がなされている。本研究もその一環である。

2. 研究の目的

ソ連研究者からの上記の指摘に対応して、スターリンがどのような状況に追い込まれ、嫌々ながら冷戦開始に踏み切ったのかを探ることが、本研究の主要目的となった。とはいえ具体的に、どのようにスターリンを追い込んだものを見つけるのかというのは、容易ではない。それは、これまで当たり前とされ、実際、私自身も自らの戦後国際政治史の授業で語ってきた、すべての分析・叙述を疑い、とりわけスターリンを追い込んだものが英米側にあったのか、なかったのかを、再度問い直すことが必要と思われた。そしてスターリンを追い込んだとおもわれるものを、英米のなかにもう一度見出すことが、これが本研究の目的である。

その際、冷戦史研究で、かつての安易な修正主義者たちが語ってきた、英米帝国主義がソ連を追い込んできたとの分析・叙述に誘惑されないことが肝要と思われた。G・コルコを始めとする修正主義者たちは、米国資本主義、いや彼らの言葉では、米国帝国主義のなかに、スターリンを追い込んだ原因を指摘できる。しかし彼らの分析・叙述は、多分に 信条的、教条的かつ非実証的なものであり、マルクス＝レーニン主義が知的に崩壊した現在、説得力があると思えない。全く新しいアプローチを考案しながら、英米のなかに、スターリンを追い込むものがあつたがどうかを探らねばならなかった。

3. 研究の方法

研究方法を多角化した。第1に、そもそも米ソ史観、つまりソ連側が研究のボールを撃ち返したコートは、米国外交史のコートでなくてはならないという想定をカッコに入れてみた。多くの研究者は、米ソ対立の前に、英ソ対立が先行したことを承認する。となると米国だけのコートという設定は怪しい。英国というコートを対象とせねばならない。しかも英米関係がどうなっているのかを考えながら。第2に、修正主義者を含め、多くの冷戦関係の外交史家は、軍事関係の研究をしてこなかった。いや毛嫌いとする言い得る。第3次世界大戦の脅威にさらされ

た冷戦という決まり文句を言いながら、どれほど実証的な軍事関係分析を行ってきたのか。ほとんどできていない。軍事関係の史料は、外交関係の史料と比べて、量的に圧倒的であり、かつ一部は機密性が高く、研究アクセスがしにくかった。第3に、たとえ軍事関係の研究をしたとしても、一国軍事研究がせいぜいであり、大国関係での軍事史を重視する国際軍事史など、ほとんどの研究者は考えて得ても、実際には、行ってこなかった。しかし本研究の課題を考える際、一国軍事研究だけで対応するとすれば、英米の研究コートを設定することとは矛盾する。

4．研究成果

研究の成果と呼べるものは、まだ、本の原稿という姿しか持っていない。が、しかし、その量は、数百頁におよび大部の書物となることは間違いない。具体的にどのような成果を主張し得るのであるのか。第1は、スターリンに嫌々ながら冷戦を選択させたのは、第2次世界大戦中からの英米軍事同盟の対ソ連用再編であった。有名なチャーチル元英国首相のフルトン演説は、「鉄のカーテン」=2つの世界の登場を述べただけでなく、英米軍事同盟の再編・強化を強調しているし、スターリンの反論にもそれへの反発が明白である。修正主義者たちが指摘した、英米の帝国主義などは、彼と彼の側近の発言・著作からして、英米接近どころか英米分離の源泉と設定されていた。第2に、本研究は、対ソ用に再編された英米軍事同盟の軍事力は、圧倒的であった。1946年当時、英米の陣営としての総力戦能力は、対ソ上、最低でも約4倍であり、質という観点でも、米国の核兵器独占、英国の圧倒的な化学兵器備蓄、ソ連が真似できない、英米の戦略爆撃能力、英米の海軍力・航空迎撃能力が存在していた。しかもそれは、客観的にそうであったと数字的・史料的裏付けをしたのみならず、実際に、英米軍部がこの対ソ用軍事同盟再編に向けて、どう議論し、かつどう動いたかを実証的に解明することができた。他方この時期、ソ連経済は戦災復興に苦しみ、数百万人の餓死者を出す有様であった。これに対して、米国が当時、世界のGDPの半分を行い、かつ世界中を飢えから救うだけの食料生産力も持っていた。第3に、本研究が発見したところでは、このスターリンを追い込んだ英米軍事同盟の対ソ用再編は、単に英米間だけの形ではなく、カナダを含む形で行われ、こののちの冷戦を貫く、いわゆる西側軍事同盟ネットワークの拡大・親密化の先駆けとなった。第4に、かくしてスターリンは、嫌々ながら、圧倒的な英米軍事同盟に対して、「平和闘争」という形での大戦争回避という政治闘争を行わざるを得なくなり、熱戦ではなく冷戦となったのであった。ただしその実、彼は、1946年当時、唯一ソ連にまともな軍事力を提供できるユーゴスラビアの総力戦能力を強化するために、軍需工業協力や武器供与を始めていた。当面の対英米戦争を避けながら、自陣営の総力戦能力を高めるしか道がない、厳しい選択であった。歴史家ペチトノフが述べた、嫌々ながらの選択と言い得た。

5．主な発表論文等

本の原稿を用意するために、史料調査、分析・叙述に没頭していたため、現在の時点(2019年6月8日)で、発表した論文も、学界での研究発表も行っていないが、この研究課題に直結する紀要論文を同年9月末に、関西学院総合政策学部の紀要で、第1号として発表することが決まっている。随時、各章を発表するつもりであり、その一方で、本としての出版先との交渉を始めるつもりである。

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。